

『ニーティタットヴァアーヴィルバーヴァ』 〈自律的真性論〉セクションの研究

石村 克

はじめに

本稿では、チッドアーナンダ・パンディタ(Cidānanda Paṇḍita)作『ニーティタットヴァアーヴィルバーヴァ』(Nītitattvāvīrbhāva)の第三章自律的真性論(svataḥprāmānya-vāda)の和訳を提示する。

チッドアーナンダは13-14世紀頃のミーマーンサー学派バツタ派の哲学者である。『ニーティタットヴァアーヴィルバーヴァ』は現在知られているところでは彼の唯一の作品である。これは、バツタ派の主に存在論と認識論を扱っており、全部で44の論題から構成されている。その中の第三論題として挙げられている自律的真性論は、バツタ派の創始者であるクマーリラ・バツタ(Kumārila Bhaṭṭa 7世紀頃)が提唱したものである。ミーマーンサー学派の根本経典『ミーマーンサー・スートラ』(Mīmāṃsā-sūtra)の存在論と認識論を扱った部分に対する復注である『ミーマーンサー・シュローカヴァールティカ』(Mīmāṃsā-śloka-vārttika)の第二章で、すべての認識(vijñāna)に関してそれらの真性(prāmānya)と偽性(aprāmānya)は自律的か他律的かという問題を提示し¹、クマーリラは真性は

¹ŚV codanāsūtra 33: sarvavijñānaviṣayam idaṃ tāvat pariḥṣyatām / pramāṇatvāpramāṇatve svataḥ kiṃ parato 'thavā //33// (「まずもって、すべての認識を主題として次のことが考察されなければならない。〔すべての認識の〕真性も偽性も自律的なのか、あるいは真性も偽性も他律的なのか、あるいは偽性は自律的であり真性は他律的なのか、あるいは真性は自律的であり偽性は他律的なのか」)

クマーリラはこの詩節で、(1)真性と偽性の両方が自律的である、(2)真性と偽性の両方が他律的である、(3)真

自律的であり、偽性は他律的であるという結論を与えている²。この箇所に関しては、ウンベーカー・バツタ(Umbeka Bhaṭṭa 8世紀頃)、スチャリタ・ミシュラ(Sucarita Miśra 11世紀頃)、パールタサーラティ・ミシュラ(Pārthasārathi Miśra 11-12世紀頃)という三人の注釈者が存在し、チッドアーナンダに先行する時代に活躍している。また、チッドアーナンダ以前の時代において、自律的真性論に対するニヤーヤ学派などの

性は他律的であり、偽性は自律的である、(4)真性は自律的であり、偽性は他律的であるという4つの可能性を考えている。(4)はクマーリラ自身の理論であり、残りの三つは想定反論として否定されている。その際、(1)は「自律的に存在していないものは存在できない」と考えている者たちの理論であり、(2)は「原因の優良性の確定によって真性は確定され、原因の劣悪性の確定によって偽性は確定される」と考えている者たちの理論であり、(3)は「真性の非存在である偽性は非実在である」と考えている者たちの理論であるというようにクマーリラは提示している(ŚV codanāsūtra 34, 39)。後代になると、(1)はサーンキヤ学派、(2)はニヤーヤ学派、(3)は仏教学派のものと思なされるようになった。クマーリラ自身が(1)の主張者に因中有果論的な考え方をもつ学派、(3)の主張者に非存在に実在性を認めない学派をあてており、(2)は内容はともかく形式上ニヤーヤ学派が自学派のものとして採用しているから、後代の解釈にはある程度の根拠がある。しかしながら、これらの容易に否定される三つの想定反論が実際に上記の学派のものであると思なすための根拠はない。

²ŚV codanāsūtra 47ab: svataḥ sarvapramāṇānām prāmānyam iti *gamyatām / *KT, NR: gamyatām, TT: grhyatām. (「すべての真なる認識手段の真性は自律的であるということが理解されなければならない」) ŚV codanāsūtra 53: tadmād bodhātmakatvena prāptā buddheḥ pramāṇatā / arthānyathātvahetūthadosajñānād apodyate //53// (「したがって、認識を本性とすることによって結果した認識の真性は、対象の別様性の認識、あるいは原因に生じた劣悪性の認識をつうじて否定される」)

他学派の批判も十分に発展している。したがって、『ニーティタットヴァアーヴィルバーヴァ』は、この理論を包括的な形でとらえるためには、有効な作品であると言える³。

和訳するにあたり、テキストは、*Nītitattvā-virbhāva* of Cidānanda. Edited by Nārāyaṇapilla. Anantaśayanasaṃskṛtagranthāvali No. 168. Anantaśyanaviśvavidyālaya, 1953. を用いた。テキストの脚注にあがっている異読は煩雑になるため本稿では省略した。

svataḥprāmāṇyavādaḥ 自律的真性論

0.1. 導入部の詩節

vedānām kartṛbhāve guṇavidhuratayā bādhi
mā mānateti
prāmāṇyasya svarūpaṃ pramitiḥ janāyos tac
ca tasya svatastvam /
mānānām lakṣaṇaṃ tadviśayavibhajaṇaṃ
tadbahiṣṭvāntaratve
ity atrācāryaguhyam praṇihitamānasaś
tattvato varṇayāmaḥ //

「ヴェーダ聖典に作者が存在し優良性 (guṇa) をもたないという理由で〔ヴェーダ聖典の〕真性 (mānatā) が否定されてはならない。

したがって、真性の本質は認識 (認識手段) の結果 (pramiti) と〔自分の〕生起 (janana) に関係している。そして、その〔真性〕のその〔本質〕は自律性 (svatastva) である。

真なる認識〔手段〕の特徴はそれ (真なる認識〔手段]) の対象をそれ (対象) の外部性と内部性にもとづいて区別することである。

以上のようなことに関して、〔クマーリラ〕先生の秘密〔の意図〕を、我々は心を定めて真実にもとづいて説明する」

0.2. 導入部の一節

iha hi prāmāṇyāprāmāṇyayoḥ svatastvaparatastve
prati vipratipadyante vādinah /

じつにこの世界では真性と偽性の自律性と他律性 (paratastva) に関して思想家たちは見解を異にしている。

1. 自律的真偽論

1.1.1. 因中有果論にもとづく自律的真偽論の証明

kecid āhuḥ—svato 'satām asādhyatvād ubhayaṃ
svata iti /

ある〔思想家〕たちは、自律的に存在していないものは実現されえないという理由で〔真性と偽性の〕両方が自律的であると主張している⁴。

⁴ŚV codanāsūtra 34ab: svato 'satām asādhyatvāt kecid

³クマーリラを思想を理解するためにこの作品が有効であることはチッドアーナンダ自身が主張している。NTĀ (239:10–13): sākūtaṃ gahaṇaṃ kumārīlamataṃ jijāsubhiḥ paṇḍitair apy asmāsv avadhīraṇā yadi paraṃ grantho 'yam abhyasyatām / no ced uddhatatarkatārkikasabhāmadhyāsthītānām bhavet tattanmārgavicakṣaṇatvavirahād ātmaiva no vañcitatāḥ // (「意義深く深遠なるクマーリラを思想を知ろうと欲している〔バクッタ派の〕学者たちも、よしんば私を軽視しようとも、この〔『ニーティタットヴァアーヴィルバーヴァ』という〕作品を繰り返し読まなければならない。もしもそうしなければ、高慢な論理をもつ論理学者たちの社会の中で暮らしている我々はそれぞれの道をはっきり見通すことはないから、まさに我々自身が欺かれることになるだろう」)

1.1.2. 因中有果論の証明

1.1.2.1. 因中有果論の証明 (1) / 因果関係を説明する理論として

1.1.2.1.1. 因果関係を説明するためには因中有果論が要請される

vadanti ca—yad asat tat na kriyate, yathā śa-śaviṣāṇam / asac cet kārakavyāpārāt pūrvam kāryam tarhi na kriyeta kriyate ca, ataḥ sad eva pūrvam api / kiṃ ca tantubhiḥ paṭaḥ sambaddho vā syād asambaddho vā / sambaddhaś ced asataḥ sambandhānupapatteḥ prāptaṃ satkāryatvam / asambaddhaś cet tantūnām evopādānavatvam, na vīraṇādeḥ paṭasyaivopādeyatvam, na viśvasya ity upādanopādeyanīyamo na syāt / asattvāsambandhayor aviśeṣāt / yathāhuḥ—

asattvān nāsti sambandhaḥ kārakaisattvasaṅgibhiḥ /
asambaddhasya cotpattim icchato na vyavasthitih //⁵

iti /

そして、彼らは次のように言っている。

存在していないものは作られることはない。たとえば、うさぎの角のように。もしも実現要素がはたらく以前に〔結果は〕存在していないとするならば、結果はもたらされえないし、もたらされることもない。したがって、〔実現要素がはたらく〕以前にも〔結果は〕絶対に存在しているのである。そしてまた、布は糸と関係しているのだろうか、それとも関係していないのだろうか。もしも関係しているとするならば、存在しないものが関係することは不合理なので、結果は〔もともと〕存在していることが帰結する。もしも関係していないとするならば、「まさに糸が〔布の〕質量因なのであり、ヴィーラナ草などは〔質量因ではない〕。まさに布が結果なのであり、すべてのものが〔結果なのではない〕」というような質量因と結果の制限はあ

āhur dvayaṃ svataḥ / (「あるひとたちは、自律的に存在しないものは実現されえないから、〔認識の真性と偽性のうち〕両方が自律的であると主張している」)

⁵STK on SK 9 に、「サーンキヤ学派の長老」(sāmkhyavṛddha) の言葉として引用されている。同詩節に対する YD にも引用される。

りえないことになる。なぜなら、非存在性と無関係性は区別がないからである。以上のことに関して次のように言われている。

「〔結果は〕存在していないならば、存在性をもつ実現要素と関係していない。そして、関係していないものが生じることを認めるひとにとって、〔因果関係は〕制限されることはない」

1.1.2.1.1. 能力の制限によって因果関係の制限を説明することはできない

syād etat—śaktito niyamān nopādānopadeya-niyamabhaṅga iti / tad ayuktam, śakteḥ śaktāśrayāyāḥ śakyeṇāsambandhe pūrvavad aniyamāpatteḥ, sambandhe cāsataḥ sambandhānupapatteḥ pūrvavat satkāryatvaprasakteḥ /

次のような反論があるかもしれない。

【反論】能力をつうじて制限されるのだから、質量因と結果の制限は破壊されることはない。

【回答】それは不合理である。なぜなら、能力をもつものを拠り所にしていない能力が能力対象と関係していないならば、前と同じように〔因果関係が〕制限されないことになってしまうし、また、〔能力が能力対象と〕関係しているとすれば、存在していないものが関係することは不合理なので、前と同じように結果は〔実現要素がはたらく以前にも〕存在していることになってしまうからである。

1.1.2.2. 結果と原因の同一性にもとづく因中有果論の証明

1.1.2.2.1. 因中有果論は結果と原因の同一性からも証明される

api ca kāraṇabhāvāc ca / na hi kāryād abhinne kāraṇe sati kāraṇād abhinnaṃ kāryam asad bhavati, virodhāt /

そしてまた、〔結果は〕原因であるから〔結果は実現要素がはたらく以前にも存在している〕。なぜなら、原因は結果と異ならないのだから、原因と異ならない結果が〔実現要素がはたらく以前に〕存在しないということはないからであ

る。というのは、〔存在性と非存在性は〕相反するからである。

1.1.2.2.2. 原因と結果の同一性の証明

1.1.2.2.2.1. 因果関係は同一性を含意する

na ca kāryasya kāraṇād abhinnavam asiddham, tantubhiḥ paṭo na bhidyate, tatkāryatvāt, yady ato bhidyate na tat tasya kāryam, yathā gaur aśvasya / tantukāryas ca paṭaḥ tasmān na tantubhyo bhidyate /

そして、結果は原因と異なるということが確立されないということはない。布は糸と異なる。なぜなら、〔布は〕それ(糸)の結果だからである。もしも〔布が〕これ(糸)と異なるとするならば、それ(布)はそれ(糸)の結果ではない。たとえば、牛が馬の〔結果ではない〕ように。そして、布は糸の結果である。したがって、〔布は〕糸と異なることはない。

1.1.2.2.2.2. 別異性は結合と分離を含意する

tathā yady ato bhidyate tena tasya saṃyogo 'prāptir vā yathā kuṇḍabadarayoḥ, meruvindhya-yor vā / na ca tantubhiḥ paṭasya saṃyogo 'prāptir vā / tasmān na tantubhyo bhidyate paṭa ityādibhir abhedasādhanāt /

また、もしも〔布が〕これ(糸)と異なるとするならば、それ(布)はそれ(糸)と結合したり分離したりするだろう。たとえば、器とナツメの木の実は〔異なるので結合するし〕、あるいはメール山とヴィンドウヤー山は〔異なるので分離している〕。そして、布は糸と結合することもないし分離することもない。したがって、布は糸と異なることはない。以上のような〔論理に〕よって、〔原因と結果が〕異なることが証明されるから〔結果は原因と異なるということが確立されないということはない〕。

1.1.2.3. 因中有果論の証明終了

ataḥ siddham satkāryatvam iti /

以上のことから、結果は〔実現要素がはたらく以前にも〕存在しているということが確立される。

1.2. 自律的真偽論批判

1.2.1. 因中有果論批判

1.2.1.1. 作られるということは存在するということを含意しない

atrocitate—na tāvat kriyamāṇatvaṃ sattva-sādhanaṃ, tasya sattve 'py anupapatteḥ / asattve 'py upapatteś ca, asādhāraṇatvāt, samdigdhavipakṣavyatirekitvāc ca / tathā hi—na sato ghaṭādeḥ kriyamāṇatvaṃ dr̥ṣṭam, kṛte kāravīpārānupapatteḥ / nāpy asataḥ kriyamāṇatvaṃ anupapannaṃ, asato 'pi samavahitapuṣkala-kāraṇasya kriyamāṇatvāvirodhāt /

以上のような主張に対して次のように述べる。

まずもって、〔あるものが〕作られるということにもとづいて、〔それが作られる以前にも〕存在しているということが証明されることはない。なぜなら、〔因中有果論者が主張するように作られることは非存在性に関して妥当しないだけでなく、〕それ(作られること)は存在性に関しても妥当しないし、〔作られることは〕非存在性に関しても妥当するからである。というのは、〔作られることは存在性と非存在性に関する〕非共通の根拠であり、〔作られることは非存在性という〕異類に存在しないことが疑わしいからである。すなわち、存在している壺などが作られることが経験されることはない。なぜなら、すでに作られているものに対して実現要素が働きかけることは不合理だからである。また、存在していないものが作られることは不合理ではない。なぜなら、存在していないものも完全な原因が整えられたならば作られるということは矛盾しないからである。

1.2.1.2. 能力によって因果関係を説明するべきである

yat punaḥ kārakair asambaddhasya kāryasyotpattāv upādānopādeyanīyamabhaṅga itī / tan mandam, kiṃcid evopādānaṃ kasmimścid eva kārye śaktam itī śaktinīyamāt /

na ca śaktir api śakyeṇāsambaddhā na niyantrīti vācyam, śakteḥ śaktāśrayāyāḥ śakyeṇāsambandhe 'pi pratīnyataśakyānukūlasvabhāvatvāt / anyathā bhavanmate 'pi pra-

dhānopādānatvād viśvasya sarvaṃ sarvarūpeṇa
sarvatra sarvadā sad iti katham vilakṣaṇavya-
vahāropapatteḥ, vivekahetor abhāvāt /

atha sattvāviśeṣe 'pi tattadabhivyanjaka-
hetusāmarthyaniyamāt tadabhivvyaktiniyamaḥ,
tarhi tanniyamād asadutpattir api bhavantīti na
virotsyate /

また、「実現要素と関係していない結果が生じるならば、質量因と結果の制限は破壊される」と〔主張していたが〕、それはばかげた話である。なぜなら、ある特定の質量因だけがある特定の結果だけに対して能力をもっているというように〔因果関係は〕能力によって制限されるからである。

【反論】能力も能力対象と関係していなければ制限できない。

【回答】そのように言うことはできない。なぜなら、能力をもつものを抛り所としている能力は、能力対象と関係していなくても、それぞれの制限された能力対象に適合した本性をもっているからである。そうでなければ、あなたの理論においても、すべてのものは根本原因を質量因としているのだから、すべてのものがすべてのものとしてすべての場所にすべてのとき存在していることになる。したがって、どうして多様な活動が説明できるだろうか。なぜなら、多様性の根拠が存在しないことになるからである。

【反論】存在性の点で区別がないとしても、それぞれ〔の特定の結果〕を顕現させる原因の能力が制限されることをつうじて、それ（結果）の顕現が制限される。

【回答】もしそうだとするならば、それ（能力）の制限をつうじて、〔顕現という〕存在していないものの生起もあることになる。したがって、〔われわれの理論と〕相反しないことになるだろう。

1.2.1.3. 原因と結果は同一ではない

yat punaḥ kāraṇābhedād iti, tad asiddham eva /
yāni tu tadabhedasādhanāni tāni pratyakṣeṇa
tantupaṭayor bhedopalabdhes tadviruddhāni na
dūṣaṇāntaram prayojayanti /

また、「〔結果は〕原因と異なるから〔結果は実現要素がはたらく以前に存在している〕」と〔主張していたが〕、それもまったく確立されない。〔結果と〕それ（原因）の同一性の確立手段は、直接知覚によって糸と布の区別が認識されるのだから、それ（直接知覚）と相反するので、他の批判を引き起こすことはない。

1.2.1.4. 因中有果論における顕現理論には問題がある

kiṃ ca kārakavyāpārāt prāg api yadi tantuṣu
paṭaḥ syāt kim iti nopalabhyate / anabhivyak-
tatvād iti cet, kim iyam abhivyaktiḥ pūrvam
asatī satī vā / satī cet pūrvam apy upalabdhiḥ,
asatī ced asatyā evābhivyakter utpattir iti katham
asadutpattiniśedhaḥ /

そしてまた、もしも実現要素がはたらく以前にも糸の中に布が存在しているとするならば、どうして〔糸の中に布は〕認識されないのだろうか。

【反論】〔糸の中の布は〕まだ顕現していないからである。

【回答】もしそうであるならば、この顕現は〔実現要素がはたらく〕前に存在していないのだろうか、それとも存在しているのだろうか。もしも存在しているとするならば、〔実現要素がはたらく〕以前にも認識される。またもしも存在していないとするならば、まさに存在していない顕現が生じることになる。したがって、どうして存在しないものが生じることが否定されるだろうか。

1.2.2. 自律的真偽論の否定根拠と否定の成立

tasmāt satkāryatvaniśedhāt prāmāṇyāprāmāṇya-
yoḥ parasparaparihāritvena kiṃcit pramāṇam
kiṃcid apramāṇam iti vyavasthānupapatteś ca
nobhayaṃ svataḥ /

それゆえに、結果が〔実現要素がはたらく以前に〕存在しているということは否定され、真性と偽性は互いに排除しあい⁶、そして「ある特定

⁶ŚV codanāsūtra 35a3/8b: svatas tāvad dvayaṃ nāsti vi-
rodhāt (「まずもって、〔認識の真性と偽性の〕両方が自律的

〔の認識〕は真であり、ある特定〔の認識〕は偽である」という確定が不合理になるから⁷、〔真性と偽性の〕両方が自律的であることはない。

2. 他律的真性論の証明

2.1. 真性が自律的であるならば真偽に対する疑いは存在しえない

kiṃ tv aprāmāṇyaṃ svataḥ prāmāṇyaṃ parata ity apare / tathā hi yadi prāmāṇyaṃ svato 'vasīyate kathaṃ tarhi vastuvṛtṭyā pramāṇe prāmāṇyāpramāṇye śaṅkyeyātām / na hy anyatarakoṭinirdhāraṇe śaṅkāvataraṭi, atiprasaṅgāt / ato guṇajñānād arthakriyājñānād vā prāmāṇyāvagamah /

一方、他〔の思想家〕たちは「偽性は自律的であり、真性は他律的である」と〔主張している〕⁸。すなわち、次のとおりである。もしも真性が自律的に決定されるとするならば、どうして実際に真なる認識に関して真性と偽性が疑われることがありえるのだろうか。なぜなら、どちらか一方の選択肢に特定されている場合に疑いが起こることはないからである。というのは〔疑いの〕過大適用になってしまうからであ

であることはない。なぜなら〔真性と偽性は〕相反するからである。』ŚV codanāsūtra 36ab: kathaṃ hy anyānapekṣasya viparītātmasambhavaḥ / (「じつに、どうして、他に依存していない〔認識〕に〔真性と偽性という〕反対の本性が生じえるだろうか」)

⁷ŚV codanāsūtra 37: vijñānavyaktibhedena bhavec cedit aviruddhatā / tathāpy anyānapekṣatve kiṃ kveti na nirūpyate //37// (「【反論】個別的認識を区別するならば〔真性と偽性の〕相反はなくなるだろう。【回答】そのような場合でも〔その個別的認識の真性と偽性は〕他に依存していないのだから、「どの〔個別的認識〕がどうであるか(真なのか偽なのか)」ということは確定されない」)

⁸ŚV codanāsūtra 38: tasmāt svābhāvikaṃ teṣām apramāṇatvam iṣyatām / prāmāṇyaṃ ca parāpekṣam atra nyāyo 'bhidhīyate //38// (「それゆえに、それら(認識)の偽性は本性的であり、そして真性は他に依存していることが認められなくてはならない。このことに関して、〔以下のような〕道理を述べよう」)

しかしながら、クマーリラがこの詩節の直後に他律的真性論の根拠として述べるのは、真性は実在である一方、偽性は非実在であるということである。それについては、チッドアーナングは無視しているようである。ŚV codanāsūtra 39: aprāmāṇyam avastutvān na syāt kāraṇadoṣataḥ / vastutvāt tu guṇais teṣām prāmāṇyam upajanyate //39// (「【提唱】偽性は原因の劣悪性から生じえない。【根拠】非実在であるから。一方、【提唱】真性はそれら(原因)の優良性によって生じる。【根拠】実在であるから」)

る。したがって、〔認識の原因の〕優良性の認識⁹、あるいは〔認識の対象の〕効果的作用の認識をつうじて〔その認識の〕真性は理解される。

2.2. 疑いと行動開始は両立する

na ca prathamam arthatathātvanīścāye kathaṃ pravṛtṭiḥ, tanniścāye vā kathaṃ prāmāṇyānīścāya iti vācyam, kṛṣyādāv ivārthasamdehād eva pravṛtṭyupapatteḥ / pravṛtṭasya cārthakriyopalabdhaupūrvāvagatasārthasārthakriyākāritvalakṣaṇam sattvaṃ niścitam iti tadviśayasya pūrvajñānasyāpi tadarthasamutthatvena paścāt prāmāṇyam niścīyate / yathoktam —

tasmin sad api mānatvaṃ viniścetum na śakyate /

uttarārthakriyājñānāt kevalam tat pratīyate //¹⁰

iti /

【反論】最初に(認識が生じた直後に)対象の如実性(arthatathātva)が確定されない場合、どうして行動が開始されるだろうか。あるいは、〔対象の如実性が〕確定される場合、どうして真性が確定されないだろうか。

【回答】そのように言うことはできない。なぜなら、たとえば農業などにおいてそうであるように、まさに対象(収穫など)に対する疑いをつうじて行動が開始されることは妥当するからである。そして、行動を開始したひとにとって、〔その対象の〕効果的作用が認識されたとき、以前に理解した対象の効果的作用をもたらすことを特徴とする存在性が確定されるのである。したがって、ある〔対象〕を対象としている最初の認識も、その対象によって生じたものとして後で真であることが確定されるのである¹¹。以

⁹ŚV codanāsūtra 44: tasmāt kāraṇasuddhatvaṃ jñānaprāmāṇyakāraṇam / svabhāvato 'pramāṇatvam tadabhāvena *lakṣyate //44// *KṚ. NR: lakṣyate, TṬ: labhyate. (「したがって、認識の真性の原因は〔認識の〕原因の清浄性(優良性)である。偽性は本性にもとづいており、それ(原因の清浄性)の非存在によって知られる。)

¹⁰TS (prāmāṇyaparīkṣā) 2971.

¹¹この箇所に近似的なことを述べているものとして次の詩節をあげることができる。ŚV codanāsūtra 82: nanu pramāṇam ity evaṃ pratyakṣādi na grhyate / na cetham

上のことに関して次のように言われている。

「真性はそれ(最初の認識)に存在しているとしても確定することは不可能である。ただ後続する効果的作用の認識をつうじてのみ、それ(最初の認識の真性)は理解される」

2.3. 効果的作用の認識は自律的に真である

na caivam arthakriyājñānasyāpi svaviṣayārthakriyāpariniścaye parāpekṣā, yenānavasthā bhavet, tasya phalarūpatvāt / phalārthaṃ hi sarvaṃ parīkṣyam, na phalam anyāpekṣam iti /

ataḥ sphuṭāvikalparūpatvāt phalarūpatvāc cārthakriyājñānaṃ svata eva svaviṣayatathātvā-vadhāraṃ pramāṇaṃ ca /

そして、このような場合、効果的作用の認識までも自分の対象である効果的作用を確定するために他〔の認識〕を要請するというのではない。もしも〔他の認識を要請するとする〕ならば無限遡及が起こってしまうだろうが。なぜなら、それ(効果的作用の認識)は果報を本質としているからである。じつに、果報のためにすべて〔の認識〕は検証される必要があるのであり、果報が他〔の認識〕を要請するとするというのではない。

以上のことから、効果的作用の認識は、明らかで疑いのないものであり、果報を本質としているという理由で、まさに自律的に自分の対象の如実性を確定するものであり、そして〔自律的に〕真である。

2.4. 行動開始の後の真性の確定には意味がある

na caivam prāmāṇyāvagamasya pravṛttyaṅgatvāt pravṛttyuttarakālam arthakriyayā tannirṇayo niṣphala itī vācyam, jñānāntareṣu niḥśaṅkapravṛttyarthaṃ viśaṃvādijñānavyāvṛttapramāṇa-pratibaddharūpaviśeṣākalanāya pravṛttyuttarakālīnanirṇayasyopayogāt / pratīyate hi pravṛttāv abhyāsavatyām ādye jñāne phalasyāprāptāv

agr̥hītena vyavahāro 'vakalpate //82// (「【反論】知覚などは〔知覚など自体によって〕「真である」というようにとらえられない。そして、以上のような場合、〔その真性が〕とらえられていない〔認識〕によって活動は成立しえない」)

apy arthakriyārūpaṃ phalam aviṣayīkurvato vijñānāntarād viśaṃvādibhyo vyāvṛttaṃ vailakṣaṇyam / yathāhuḥ —

vṛttāv abhyāsavatyām tu vailakṣaṇyam pratīyate / atadviṣayato jñānād ādye 'prāpte 'pi tat-phale //¹²

iti /

【反論】このような場合、真性の理解は行動開始の要因なのだから、行動を開始した後で効果的作用〔の認識〕によってそれ(真性)を確定することは不毛である。

【回答】そのように言うことはできない。なぜなら、他の認識が生じた場合に疑いをともなわない行動が開始されることを目的として〔最初の認識が対象に関して〕裏切る認識〔の集合〕から排除され真なる認識〔の集合〕と関係している特殊な形相をとらえるために行動開始後の〔最初の認識の真性の〕確定は役に立つからである。じつに、行動開始が繰り返される場合、最初の認識の特性は、果報が獲得されていないときでも、効果的作用という果報を対象にしない他の認識をつうじて〔対象に関して〕裏切る〔認識の集合〕から排除されていることが理解される。以上のことに関して次のように言われている。

「しかし、活動が繰り返される場合、最初〔の認識〕の特性は、それ(最初の認識)の果報が獲得されていないとしても、それ(果報)を対象にしない認識をつうじて理解される」

2.5. 他律的真性論の証明終了

tasmāt jhaṭīti niḥśaṅkapravṛttir api tatra tatra viśaṃvādīvyāvṛttapramāṇapratibaddharūpaviśeṣalingakānumānād eveti na svataḥ prāmāṇyāvabhāsaḥ /

したがって、即座に起こる疑いをともなわない行動開始も、どんな場合でも〔対象に関して〕裏切る〔認識の集合〕から排除され真なる認識〔の集合〕と関係している特殊な形相を徴表と

¹²TS (svataḥprāmāṇyaparīkṣā) 2969.

する推理に必ずもとづいているのである。したがって、真性の顕現は自律的ではない。

3. 他律的真性論批判,あるいは自律的真性論

3.0. 導入部

atrābhīdhīyate—

bhavet prāmānyasaṃvittir arthayāthārthyāniścayāt /
tāniścayas tu saṃvādād guṇajñānāc ca neṣyate //

以上の理論に対して次のように述べられる。「真性は〔顕現した〕対象が〔実際の〕対象のとおりであることを確定することをつうじて認識される。

しかし、それ（顕現した対象が実際の対象のとおりであること）の確定は〔他の認識との〕整合性にもとづくことも優良性の認識にもとづくことも認められない」

3.1. 真性の定義

3.1.1. 真性の定義について

pramitisādhakatamatvaṃ hi prāmānyam / pramitiś cānadhigatatathābhūtārthāvadhāraṇam /

じつに、真性は、認識（認識手段）の結果の最も有効な実現手段であることである。そして、認識（認識手段）の結果は、まだ理解されていない如実である対象の確定である。

3.1.2. 「確定」という言葉は認識だけでなく顕現も意味している

na caivam indriyāder eva prāmānyam na jñānasya, tasyāvadhāraṇarūpatvenāvadhāraṇāntarasādhakatamatvānupapatter iti vācyam, jñānaprākātyayoḥ kāryakāraṇabhāvenādūraviprakṛṣṭayor ekarūpavyutpattiyartham avadhāraṇasābdena tantreṇopādānāt /

【反論】そうであるとするならば、まさに知覚器官などが真〔なる認識手段〕になり、認識は〔真になることは〕ない。なぜなら、それ（認識）は確定を本質とするのだから他の確定を完全に実現することは妥当しないからである。

【回答】そのように言うことはできない。認識と顕現は因果関係にあるので遠くに引き離されることはないから、〔それらに共通な〕同一の本質を説明するために、二つの意味を一つの言葉で表示するという方法によって (tantreṇa)「確定」という言葉で〔認識と顕現という二つのものが〕表現されているからである。

3.1.3. 真なる認識手段と真なる認識の性質として真性は実在している

tataś cāyam arthaḥ sampadyate—dvididharūpam avadhāraṇam, jñānarūpaṃ prākātyarūpaṃ ca / tatrānadhigatatathābhūtārthagocarātvena prākātyarūpāvadhāraṇasādhakatamatvaṃ jñānasya prāmānyam, tādrśārthagocarātvena jñānarūpāvadhāraṇasādhakatamatvam indriyādeḥ prāmānyam iti / sādhakatamatvaṃ ca tādrśārthāvadhāraṇānugūṇaḥ pramāṇagataḥ śaktibheda eva / tathā cānadhigatatathābhūtārthāvadhāraṇam pramitiḥ, tatsādhanam pramāṇam, tadbhāvaḥ prāmānyam iti nāśabdārthatvam api /

そして、そのことにもとづいて、次のような事柄が成立する。確定は、認識と顕現という二種類の形をもっている。それらのうち、認識の真性は、まだ理解されていない如実である対象を対象領域とするものとして顕現の形をもつ確定の最も有効な実現手段であることである。知覚器官などの真性は、そのような〔まだ理解されていない如実である〕対象を対象領域とするものとして認識の形をもつ確定の最も有効な実現手段であることである。そして、〔確定を〕完全に実現することは、そのような対象の確定に適合し、真なる認識〔および真なる認識手段〕に存在する個別的な能力にほかならない。そして、そのような場合、まだ理解されていない如実である対象の確定が認識（認識手段）の結果である。それ（認識の結果、および認識手段の結果）の実現手段が真なる認識〔および真なる認識手段〕である。そして、それ（真なる認識および真なる認識手段）の本質が真性である。というわけで、〔真性が〕言葉の対象ではないということもない。

3.2. 真偽の確定に関する問題

3.2.1. 真性は対象の如実性の確定をつうじて、偽性は対象の非如実性の確定をつうじて確定される

tad evam anadhigatatathābhūtārthāvadhāraṇaśaktiḥ anevamvidhārthāvadhāraṇaśaktiś ca pramāṇāpramāṇagocare prāmāṇyāprāmāṇye / te ca tathābhūto 'yam artha ityevamrūpāt tathātvāvadhāraṇād atathābhūto 'yam artha ityevamrūpād atathātvāvadhāraṇāc ca cakāstaḥ /

したがって、以上のように、まだ理解されていない如実である対象を確定する能力と、そのようではない対象を確定する能力が真なる認識〔および真なる認識手段〕と偽なる認識〔および偽なる認識手段〕という対象領域に存在する真性と偽性である。そして、それら（真性と偽性）は、「この対象は如実なものである」というこのような形で〔対象の〕如実性を確定することをつうじて、そして「この対象は如実ではないものである」というような形で〔対象の〕非如実性を確定することをつうじて、明らかになる。

3.2.2. 真性は自律的に確定され、偽性は他律的に確定されると言える

tatra tathābhūtārthāvadhāraṇam arthakriyā-jñānādilakṣaṇaparāṇapekṣatvena jñānasvarūpamātrādhīnam iti tadavaseyam prāmāṇyam api svato 'vasīyata ity ucyate / atathābhāvāvadhāraṇam tu jñānasvarūpamātrānadhīnatvena kāraṇadoṣāvagamādilakṣaṇaparāṇapekṣam iti tadavaseyam aprāmāṇyam api parato 'vasīyata ity ucyate /

それらのうち、如実である対象の確定は効果的作用の認識などという他のものに依存せずには認識自体だけに依存している¹³。というわけで、それ（如実である対象の確定）によって確定されえる真性も自律的に確定されると言える。

¹³ŚV codanāsūtra 83: *pramāṇam grahaṇāt pūrvaṃ svarūpeṇaiva samsthitam / nirapekṣam svakāryeṣu grhyate pratyañtaraiḥ //83// *TṬ, KT: pramāṇam, NR: prāmāṇyam. (「真なる認識は、〔別の認識によって自分が〕とらえられる以前にまさにそのもの（真なる認識）として確立されており、自分の結果に関して他に依存せず、別の認識によってとらえられる」)

一方、〔対象の〕非如実性の確定は認識自体だけに依存せずには〔認識の〕原因の劣悪性の理解などという他のものに依存している¹⁴。というわけで、それ（対象の非如実性の確定）によって確定されえる偽性も他律的に確定されると言える。

3.2.3. 対象の非如実性の確定の他律性の証明

na cātathābhāvāvadhāraṇam api jñānasvabhāvādhīnam, bhramabādhayor asambhavaprasaṅgāt / na ca śuktau rajatam atathābhūtam iti gocarayato jñānasya bhramatvaṃ bādhasambhavo vā / tad evam atathābhūtasypī tathābhūtatvenaiva jñānasvabhāvād avadhāraṇam, atathābhūtatvena tu kāraṇadoṣāvagamād bādhakapratyañyād vā parata iti siddham /

そして、〔対象の〕非如実性の確定までも認識自体に依存しているということはない。なぜなら、錯誤も〔他の認識による〕否定も起こりえないことになってしまうからである。また、貝殻に対して「〔これは〕非如実である銀である」ということを対象領域にする認識は、錯誤的でもなければ、〔他の認識によって〕否定される可能性もないことになる。したがって、以上のように、非如実である〔対象〕も、まさに如実であるものとして、認識自体をつうじて確定されることになる。しかし、〔非如実である対象は〕非如実であるものとして、〔認識の〕原因の劣悪性の理解、あるいは否定的認識をつうじて他律的に〔確定される〕。以上のことが確立される。

¹⁴ŚV codanāsūtra 85–86: apramāṇam punaḥ svārthagrāhakaṃ syāt svarūpataḥ / nivṛttis tasya mithyātve nāgrhīte parair bhavet //85// na hy arthasyātathābhāvāḥ pūrvenāttas tathātvavat / tatrāpy arthānyathābhāve dhīryadvā duṣṭakāraṇe //86// (「しかしながら、偽なる認識は自分の形相をつうじて自分の対象をとらえるものである。それ（錯誤性）の消滅は別〔の認識〕によって錯誤性がとらえられなければ起こりえない。なぜなら、対象の非如実性は〔対象の〕如実性とちがって最初〔の認識〕によってとらえられることはないからである。それ（対象の非如実性）に関しても対象の別様性に対する認識、あるいは劣悪な原因に対する〔認識〕が〔知るための方法で〕ある」)

3.2.4. 対象の如実性の確定の自律性の証明

3.2.4.1. 無限遡及にもとづいて対象の如実性の確定の他律性は否定される

na caivam indriyaṃ svaviṣayatathātvādhāraṇāyāpi guṇajñānam arthakriyājñānam vā param apekṣate jñānam, tathā satī tayor api svaviṣayatathātvādhāraṇāya parāpekṣatvena tatpāpy evam ity anavasthāpāt /

【反論】そのような場合、知覚器官は、自分の対象の如実性を確定するためにも、〔認識の原因の〕優良性の認識、あるいは効果的作用の認識という他の認識を必要とする。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、そのような場合、それら（優良性の認識と効果的作用の認識）も自分の対象の如実性を確定するために他のものを必要とするのでそれ（他のもの）に関しても同様であるというように無限遡及が起こってしまうからである¹⁵。

3.2.4.2. 効果的作用の認識によって無限遡及を回避するということができない

3.2.4.2.1 効果的作用の認識と他の認識の間に違いはない

na caivam arthakriyājñānasya svata eva svaviṣayatathātvādhāraṇād avadhrtatathābhāvena tadviṣayeṇa sādhanajñānaviṣayatathābhāvādhāraṇam, tena ca tatprāmāṇyāva-

¹⁵ŚV codanāsūtra 49–51: jāte 'pi yadi vijñāne tāvan nārtho 'vadhāryate / yāvat kāraṇasuddhatvaṃna pramāṇāntarād bhavet //49// tatra jñānāntarotpādaḥ pratīkṣyaḥ kāraṇāntarāt / yāvad dhi na paricchinnā śuddhis tāvad asatsamā //50// *tasyāpi kāraṇe śuddhe tajjñāne syāt pramāṇatā / tasyāpy evam itītham ca na **kvacid vyavatiṣṭhate //51// *KṬ, NR: tasyāpi kāraṇe śuddhe tajjñāne syāt pramāṇatā, TṬ: tasyāpi kāraṇe 'śuddhe tajjñānasyāpramāṇatā. **KṬ, NR: kvacid, TṬ: kiñcid. (「もしも、認識が生じている場合にも〔その認識の〕原因の清浄性（優良性）が別の真なる認識をつうじて〔決定され〕ないかぎり、対象が決定されないとするならば、その場合〔以下のような事態が起こる〕。別の認識の生起は別の認識原因にもとづいていることが期待されなくてはならない。なぜなら、清浄性（優良性）は決定されないかぎり存在しないも同然だからである。それ（清浄性の認識）も〔その〕原因が清浄（優良）である場合に、それ（清浄な原因）の認識は真となるだろう。それ（別の認識の原因の清浄性の認識）もまた同様である。以上のように〔真性は〕決して何にもとどまることはない」)

dhāraṇāt parata eva prāmāṇyāvagamah¹⁶ / na cānavasthāpīti vācyam, viśeṣābhāvāt /

【反論】そのような場合、効果的作用の認識はまさに自律的に自分の対象の如実性を確定するので、その如実性が確定されたそれ（効果的作用の認識）の対象によって、〔対象の〕確立手段である〔最初の〕認識の対象の如実性は確定される。そして、それ（対象の如実性の確定）によってそれ（最初の認識）の真性が確定されるのだから、まさに他律的に真性が理解される。そして、無限遡及も起こらない。

【回答】そのような言うことはできない。なぜなら、〔最初の認識と効果的作用の認識のあいだに〕違いはないからである。

3.2.4.2.2. 効果的作用の特別性の否定

sphuṭāvikalpatvaṃ viśeṣa iti cet, na, sādhanajñāne 'pi sāmīyāt / sādhanapratyayānantarajatvaṃ phalapratyayatvaṃ ca viśeṣa iti cet, na, svapne kāminirūpasāadhanajñānānantarabhavaḥ tatparirambhalakṣaṇaphalajñānasya svata eva svaviṣayatathātvādhāraṇatvena svataḥprāmāṇyaprasaṅgāt /

【反論】〔効果的作用の認識には〕明らかで疑いのないという〔最初の認識との〕違いがある。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔対象の〕確立手段である認識も同じ〔ように明らかで疑いが無い〕からである。

【反論】〔効果的作用の認識には、対象の〕確立手段である認識の直後に生じることと果報の認識であることという〔最初の認識との〕違いがある。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、睡眠時における美しい女性の姿を確立する認識の直後に生じる彼女を抱くという果報の認識は、まさに自律的に自分の対象の如実性を確立するものとして自律的に真であることになってしまうからである。

¹⁶Text: parata evāprāmāṇya-. テキストの読みに従えば「まさに他律的に偽性が理解される」となるが、文脈にそぐわないという理由で読みを訂正した。

3.2.4.2.3. 快感と苦痛という果報の認識をつうじて最初の認識の真性を確定することはできない

atha svapne sukhaduḥkhayor eva phalatvād etayoś ca sator eva jñānaviṣayatvāt, phalajñānasya svaviṣayatathātāvādhāraṇaṃ prāmāṇyaṃ ca svata eva / yady evam astu tarhi phalajñānasya svaviṣayatathātāvādhāraṇakatvam, avadhṛtatathātātāt tu tadviṣayān na sādhanajñānaviṣayasya tathātāvādhāraṇaṃ yuktam, atathābhūtād api sādhanajñānaviṣayāt kāmīnīsaṅgama-vibhramādīlakṣaṇāt sukhaduḥkhādirūpasya phalasyopapatteḥ /

【反論】睡眠時においてまさに快感と苦痛が果報なのであり、まさに存在しているこれら(快感と苦痛)が〔果報の〕認識の対象なのであるから、果報の認識は自分の対象の如実性を確定し、まさに自律的に真である。

【回答】もしもそのようであるとするならば、果報の認識は自分の対象の如実性を確定するものである。しかし、その如実性が確定されたそれ(果報の認識)の対象をつうじて〔対象の〕確立手段である認識の対象の如実性が確定されるということは妥当しない。なぜなら、非如実である〔対象の〕確立手段である認識の対象(美しい女性の姿)をつうじて起こる美しい女性と交わるといふ錯誤的認識を特徴とする〔認識〕によって快感と苦痛という果報が〔生じることは〕妥当するからである。

3.2.4.2.4. 絶対に対象を逸脱しないのは覚醒時の果報の認識というより原因に劣悪性がない認識である

athopaplutasvapnāvasthotpannaphalapratyayaviṣayatathātvasya vyabhicāre 'py anupaplutajāgarāvasthotpannaphalapratyayaviṣayatathātāvādyabhicāriṇaḥ sādhanajñānaviṣayatathātāvādhāraṇam, tarhi dūrātvādiṣu viṣyadoṣeṣu, timiratvādiṣu karaṇadoṣeṣu, pāriplavādiṣu manodoṣeṣu vā satsu jāyamānasya vyabhicāre 'pi trividhadoṣābhāve jāyamānasya sādhanajñānasya svaviṣayatathātāvādhāraṇam astu kṛtam itarāpekṣayā /

【反論】錯誤的である睡眠の状態で生じた果報の認識の対象の如実性は逸脱するとしても、錯誤的でない覚醒の状態で生じた果報の認識の対象の如実性は逸脱することはないので、それをつうじて〔対象の〕確立手段である〔最初の〕認識の対象の如実性は確定される。

【回答】そうであるとするならば、遠さなどという対象の劣悪性、眼病などという知覚器官の劣悪性、あるいは不安などという精神器官の劣悪性が存在する場合に生じた〔認識〕は〔対象を〕逸脱するとしても、三種類のものの劣悪性が存在しない場合に生じた〔対象の〕確立手段である〔最初の〕認識の方は、自分の対象の如実性を確定する。〔したがって〕他〔の認識〕を必要として何になるだろうか。

3.2.4.2.5. 果報の認識も最初の認識も同じように自分の対象の如実性を確定する

kim ca phalajñānam iva sādhanajñānam api kutaḥ svaviṣayatathātvaṃ nāvadhārayati / saṃdehagrastatvād iti cet, kim idānīm sarvam eva sādhanajñānaṃ svaviṣayatathātvaṃ atathātvaṃ ca ghaṭayat saṃdeharūpam / yady evam kutas tarhi sādhanajñānasya parato viṣayatathātāvādhāraṇam / arthakriyājñānād iti cet, na, tasya svaviṣayatathātvaṃātravyāpārāt / athārthakriyāviṣayād eva jñānād avadhṛtatathātātāt sādhanajñānaviṣayatathātvaṃ anumeyam, tarhi sādhanajñānaviṣayatathātvasyārthakriyājñānaviṣayatathātvasyāpy avyabhicārāvagamāya prathamataḥ pramāṇāntareṇa niścayo vācyā iti siddhaṃ sādhanajñānasyāpi svaviṣayatathātāvādhāraṇakatvam /

そしてまた、どうして、果報の認識と同じように〔対象の〕確立手段である〔最初の〕認識も自分の対象の如実性を確定しないだろうか。

【反論】〔対象の確立手段である最初の認識は〕疑いによって飲み込まれているから〔自分の対象を確定しない〕。

【回答】そうであるならば、自分の対象の如実性と非如実性をもたらすまさにすべての〔対象の〕確立手段である認識は、疑いを本質とすることになってしまう。もしそのようであるなら

ば、〔対象の〕確立手段である認識は、他のどのようなものをつうじて対象の如実性を確定するのだろうか。

【反論】効果的作用の認識をつうじて〔対象の如実性を確定するの〕である。

【回答】それはありえない。なぜなら、それ(効果的作用の認識)は自分の対象の如実性だけに關してはたらくからである。

【反論】効果的作用を対象とする〔その対象の〕如実性が確定されている認識をつうじてのみ〔対象の〕確立手段である認識の対象の如実性は推理されえるのである。

【回答】〔対象の〕確立手段である認識の対象の如実性も効果的作用の認識の対象の如実性も、非逸脱性を理解するために最初に他の真なる認識による確定〔が必要であること〕が主張されなくてはならない。したがって、〔対象の〕確立手段である認識も自分の対象の如実性を確定することが確立される¹⁷。

3.2.4.3. 対象の如実性は推理によって確定されえない

na ca tatrāpy avinābhāvasāpekṣatvam, parasparāśrayaprasaṅgāt / ato 'bhyāsadaśāpannasvaviṣayatathātvapratiḥbaddharūpaviśeṣalingānumeyaṃ viṣayatathātvam ity apāstam, jñānagatasya tādrśārūpaviśeṣasyādarśanāt / uktena krameṇa vyāptyavagamānupapatteś ca /

【反論】その場合でも、〔対象の如実性の確定は、対象の如実性と真なる認識の〕不可離の關係に依存している。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、相互依存になってしまうからである。

以上のことから、「対象の如実性は、繰り返しの段階に到達し、対象の如実性と關係している特殊な形相という徴表によって推理されえる」という〔理論は〕放棄される。なぜなら、認識

¹⁷ŚV codanāsūtra 76: kasyacit tu yadīṣyeta svata eva pramāṇatā / prathamasya tathābhāve pradveṣaḥ kimnibandhanāḥ //76// (「もしも、〔最初の認識とは別の〕ある〔認識〕の真性がまさに自律的であると認められるのなら、最初の認識がそうであること(真性が自律的であること)を憎む(否定する)ことにどんな根拠があるのだろうか)」

に存在するそのような特殊な形相は経験されないし、すでに述べたように、遍充關係の理解は妥当しないからである。

3.2.4.4. 対象の如実性の確定の自律性の証明終了

tat siddham jñānāni svaviṣayatathātvādhāraṇa na parāpekṣāṅti /

したがって、「認識は自分の対象の如実性を確定することに関して他のものを必要としない」ということが確立される。

3.2.5. 対象の如実性の確定の自律性は疑いの存在によって否定されない

3.2.5.1. 疑いの発生条件

nanv evaṃ yadi jñānāni svata eva svaviṣayam upasthāpya tathātvam avadhārayanti kutas tarhi saṃdehaḥ / ucyate—na tāvat sarvatra saṃdehaḥ, trividhadoṣābhāve jñāyamāneṣu viṣayeṣu saṃdehasyaivābhāvāt / yatrāpi kvacit saṃdehaḥ tatrāpi jñānasvarūpād eva svaviṣayatathātvādhāraṇam, kiṃ tu kācādiṣu doṣeṣu satsū sūktikārajatādāv atathābhūte 'pi tathātvādhāraṇadarśanād bhavati saṃdehaḥ—kiṃ doṣasaṃnidher atathābhūta eva tathātvādhāraṇam idam uta tathābhūta eveti /

【反論】このような場合、もしも認識はまさに自律的に自分の対象を措定して〔その対象の〕如実性を確定するのであれば、疑いは何をつうじて起こるのだろうか。

【回答】まずもって、あらゆる場合に疑いが生じるということはない。なぜなら、三種類のもの(対象、知覚器官、精神器官)の劣悪性がない場合には、認識されている対象に関してまさに疑いは生じないからである¹⁸。何らかの対象に関して疑いが生じた場合にも、まさに認識の本質をつうじて自分の対象の如実性は確定されている。しかし、眼病などの劣悪性がある場合、貝殻に対する銀などという非如実である〔対象〕に關しても如実性の確定が経験されるので、「劣

¹⁸ŚV codanāsūtra 60cd: doṣajñāne tv anutpanne nāśānkā *niṣpramāṇikā //60// *TT, KT: niṣpramāṇikā, NR: niṣpramāṇatā. (「しかし、劣悪性の認識が生じない場合、懸念は根拠をもたないから起こらない」)

悪性があるのだから、これはまさに非如実である〔対象〕に関して如実性を確定しているのか、それとも、まさに如実である〔対象〕に関して〔如実性を決定しているのか〕というような疑いが生じる。

3.2.5.2. 疑いの消滅条件

tataś cātathābhūta eva tathātvāvadhāraṇavyāpakam kāraṇadoṣabādhaprayayayoḥ sadbhāvaṃ prayatnenāpi jijñāsamāno yadi nākalayet tato yogyānupalambhena tadabhāvam avadhārayaṃ tadvyāpyasyātathābhūta eva tathātvāvadhāraṇasyāpy abhāvam avadhārayati /

そして、その〔疑い〕にもとづいてまさに非如実である〔対象〕に関する如実性の確定を遍充するものである〔認識の〕原因の劣悪性と否定的認識の存在性を努力してでも認識しようとするひとは、もしも〔それらの存在性を〕とらえることができないならば、認識可能なものの非認識によってそれ（劣悪性と否定的認識の存在性）の非存在を確定し、それ（劣悪性と否定的認識の存在性）によって遍充される「まさに非如実である対象に対する如実性の確定」の非存在をも確定する。

3.2.5.3. 疑いが生じた場合における対象の如実性の確定の自律性の証明

tataś cāsaṃjātaśaṅkam ivotpannadhvastaśaṅkam api svata eva svaviśayatathātvāvadhāraṇam / evaṃ ca bādhakāraṇadoṣayor abhāvāvagama-syāpy atathābhāvaśaṅkocchedamātravyāpāra-tvāt siddham svaviśayatathātvāvadhāraṇe parānapekṣatvalakṣaṇam anapekṣatvam api /

そして、それゆえに、それに関して疑いが生じていない〔認識〕と同じように、それに対して疑いが生じて消滅した〔認識〕も、まさに自律的に自分の対象の如実性を確定している¹⁹。そして、このような場合、〔他の認識による〕否

¹⁹ŚV codanāsūtra 60ab: svata eva hi tatrāpi doṣājñānāt pramānatā / (「じつに、その（三番目の認識によって二番目の認識が否定されて最初の認識が真となった）場合も、劣悪性の無認識をつうじて〔最初の認識の〕真性はまさに自律的である」)

定と〔認識〕原因の劣悪性の非存在の理解も非如実性の疑いを取り除くためだけにはたらくから、〔最初の認識が〕自分の対象の如実性を確定するために依存性がないこと、すなわち他に依存しないことも確立される。

3.2.6. 真性の確定に関する自律性（自分にもとづくこと）の自（自分）の意味

tasmāt svaśabdasyātmīyavacanatvena jñāna-svarūpādhiṇāt tathātvāvadhāraṇād avasīyamānaṃ prāmāṇyaṃ svato 'vasīyata ity uktam /

したがって、〔「自律性」という言葉の〕「自」という言葉は「自分と関係するもの」を表示しているので、認識自体に依存している如実性の確定をつうじて真性が確定されるならば「〔真性は〕自律的に確定される」と言える。

3.2.7. 対象の如実性の確定にもとづく真性の確定に関する問題点の回避

nanv evam atathābhūte 'pi tathātvāvadhāraṇa-darśanāt kathaṃ tataḥ prāmāṇyānumānam / yathā bāṣpe dhūmabhramadarśane 'pi dhūmād dhūmadhvajānumānam ity avagama tuṣyatu bhavān /

【反論】そのような場合、非如実である〔対象〕に関しても如実性が確定されることが経験されるのだから、どうしてそれ（如実性の確定）をつうじて真性が推理されるだろうか。

【回答】例えば、蒸気に対して煙が誤って認識されることが経験されるとしても、煙をつうじて煙を徴表とする推理が生じるというように理解して、あなたは満足しなければならない。

3.2.8. 真性の確定の自律性もある意味では他律的である

yat punaḥ prāmāṇyaṃ parato jñāyate, an-abhyāsadaśāyāṃ sāmśayikatvāt, aprāmāṇyavat, ityādi prāmāṇyasya parato 'vagamasādhanam, tad asmanmate 'pi tathātvāvagamārūpāt parata eva tadavagateḥ siddhasādhanam draṣṭavyam /

【反論】しかしながら、

【提唱】真性は他律的に認識される。

【根拠】なぜなら、〔ある特定の認識と真性の随伴が〕繰り返し〔認識されて〕いない段階では、〔その特定の認識の真性は〕疑わしいからである。

【実例】偽性と同じように。

などという〔論証〕が、真性は他律的に理解されるということを確認する。

【回答】それは、われわれの理論においてもまさに〔対象の〕如実性の理解という他のものにもとづいてそれ(真性)は理解されるのだから、すでに確立された論証であるとみなされるべきである。

3.3. 真偽の生起に関する問題

3.3.1. 他律的真偽論

3.3.1.1. 認識の原因から真性が生じるのならば偽なる認識も真であることになってしまう

nanu prāmāṇyasya jñaptāv anapekṣatve 'py utpattau sāpekṣatvam eva / tathā ca naiyāyikā vadanti—yadi jñānahetumātrādhīnaṃ prāmāṇyaṃ bhavet tarhi apramāṇam api pramāṇam eva bhavet, na hi tatra jñānahetavo na santi, tathā saty apramāṇe jñānatvasyāpy asambhavaprasaṅgāt /

【反論】真性は理解に関して〔他に〕依存していないとしても、生起に関しては必ず〔他に〕依存している。そして、そのことに関してニヤーヤ学派は次のように主張している。

もしも真性が認識の原因だけに依存しているとするならば、偽なる認識も真にほかならないことになってしまう。なぜなら、それ(偽なる認識)に関して認識の原因は存在しないということはないからである。というのは、そのように〔偽なる認識には認識の原因は存在しない〕とするならば、偽なる認識には認識性も存在しえないことになってしまうからである。

3.3.1.2. 劣悪性の非存在が真性の原因であるとしても真性の生起は他律的になる

atha doṣābhāvasya prāmāṇyahetutvāt sati doṣe tadabhāvān nātiprasaktiḥ, tarhi doṣābhāvam adhikam āsādyā prāmāṇyam api jāyata iti katham

jñānahetumātrajātvaṃ /

【反論】劣悪性の非存在が真性の原因であり、劣悪性が存在する場合にはそれ(真性)は存在しないのだから、〔真性の偽なる認識に関する〕過大適用は起こらない。

【回答】もしそうであるとするならば、真性も劣悪性の非存在という〔認識の原因に〕付加的なものを得て生じることになる。したがって、どうして〔真性は〕認識の原因だけによって生じるだろうか。

3.3.1.3. 真性は優良性にもとづき、偽性は劣悪性にもとづく

atha doṣābhāvasya prāmāṇyahetutve 'pi guṇasya tadahetutvāt tadabhāve 'pi vedānāṃ svataḥ prāmāṇyam, tarhi guṇasya prāmāṇyahetutvena doṣābhāvādyā aprāmāṇyaṃ vedānāṃ svataḥ prasajet / na hi guṇadoṣayoḥ prāmāṇyāprāmāṇye praty anvayavyatirekayor viśeṣam upalabhāmahe / tat siddham ubhayam ubhayasmāt parata iti /

【反論】劣悪性の非存在が真性の原因であるとしても、優良性はそれ(真性)の原因ではないのだから、それ(優良性)が存在しなくてもヴェーダ聖典は自律的に真である。

【回答】優良性が真性の原因なので劣悪性の非存在はそれ(真性)の原因ではないから、それ(劣悪性)がないとしても優良性がなければ、ヴェーダ聖典は自律的に偽であることになってしまう。なぜなら、優良性の真性に対する肯定的随伴と否定的随伴と、劣悪性の偽性に対する肯定的随伴と否定的随伴の違いをわれわれはとらえるということはないからである。したがって、〔真性と偽性という〕二つのものは〔それぞれ優良性と劣悪性という〕二つの他のものにもとづいているということが確立された。

3.3.2. 他律的真偽論批判、あるいは自律的真性論

3.3.2.1. 真性と偽性のうち一方は認識の原因にもとづき、他方は別の原因にもとづいている

atrābhīdhīyate—yatkāryagatā hi yā śaktiḥ tasyā

bādhakābhāve tatkāraṇamātrādhīnatvam, na
hetvantarādhīnatvam ity eva nyāyyam, anyathā
dāhakatvasya bahnikāraṇamātrādhīnatvena
hetvantarādhīnatvaprasaṅgāt / evaṃ ca tathā-
bhūtārthāvadhāratvaśaktiḥ prāmāṇyam atathā-
bhūtārthāvadhāratvaśaktir aprāmāṇyam
ca jñānagatam iti tayor api jñānahu-
mātrādhīnatve prāmāṇyasyāpy aprāmāṇya-
prasaṅgād ekaṃ jñānahunmātrādhīnam, itarat tu
hetvantarādhīnam iti prāptam /

以上〔の理論〕に対してつぎのように回答される。

ある結果に存在する能力は、否定するものがない場合、その〔結果〕の原因にだけ依存しているのであって、他の原因に依存することはない²⁰。まさに以上のことは論理にかなっている。なぜなら、もしもそうでなければ、燃やすものであることは火の原因だけに依存するのではなく他の原因に依存することになってしまうからである。そして、このような場合、如実である対象を確定するという能力である真性と、非如実である対象を確定するものであることという能力である偽性は、認識に存在している。したがって、それら(真性と偽性)はどちらも認識の原因だけに依存しているとするならば〔認識は〕真でも偽でもあることになってしまうから、〔真性と偽性のうち〕ひとつは認識の原因だけに依存し、もうひとつの方は別の原因に依存しているということが帰結する。

3.3.2.2. 生起に関する真性の自律性と偽性の他律性を示す詩節

tatra ca /

pramāṇyam anuvṛttatvāl lāghavāc ca svato
dhiyām /

²⁰ŚV codanāsūtra 47cd-48: na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena śakyate //47// ātmalābhe *ca bhāvānām kāraṇāpekṣitā bhavet / labdhātmanām svakāryeṣu pravṛttiḥ svayam eva tu //48// *KT, NR: ca, TT: hi. (「なぜなら、能力が〔能力をもつもの〕自体にもとづいて存在しておらず他のものによってもたらされるということはいかなるからである」)(「そして、存在は生じるために原因を必要とするだろうが、〔原因によって〕生じたならば自分で自分の結果〔を生じさせる〕ために作用する」)

doṣānvayitvād vaicitryād aprāmāṇyam ca na
svataḥ //

そして、それら(真性と偽性)のうち、「真性は認識〔自体〕に随伴し簡潔性にもとづいて自律的であり、偽性は劣悪性に随伴し多様なので自律的ではない」

3.3.2.2.1. 真性は認識の原因に随伴するから自律的である

tad dhi tatsāmagrījanyam, yady asyām satyām
anuvartata eva / na cāprāmāṇyam jñānasām-
agryām satyām anuvartate pramāṇajñāneṣu
tadadarśanāt / anuvartate tu prāmāṇyam idaṃ
rajatam ityādijñāne 'pi puvartitvatrikoṇatvādy-
amṣe tathābhūtārthāvadhāratvalakṣaṇam /
na caitāvataḥ pramāṇāpramāṇavibhāgabhaṅgaḥ,
kevalasatyarūpasya pramāṇatvam satyāsayarūpa-
sya cāpramāṇatvam iti vibhāgat /

じつに、もしも〔あるものが〕この〔原因集合〕が存在するとき必ずその後が続いて生じるならば、それはその原因集合によって生じる。そして、偽性が認識の原因集合が存在するときその後が続いて生じるということはない。なぜなら、真なる認識にはそれ(偽性)は見られないからである。一方、「これは銀である」などという認識にも、目の前にあることや三角形であることなどという部分に関して、如実である対象を確定するものであることという真性は付き従う。そして、この限りのことで真なる認識と偽なる認識の区別がなくなるということはない。なぜなら、ありのままの形相だけをもつ〔認識〕は真であり、ありのままの形相とありのままでない形相をもつ〔認識〕は偽であるというように〔真なる認識と偽なる認識は〕区別されるからである。

3.3.2.2.2. 真性は想定 of 簡潔性にもとづいて自律的である

lāghavāc ca / jñānahunmātrādhīnam jñānanakatvaśaktu
kalpyāyām pramāṇajñānānugūṇatvena kalpane
śakyasyaivādhikyaṃ na śakter iti lāghavam /
guṇadoṣābhāvayor anyatarādhīnatve tu prā-

mānyasya jñānāhetūnām jñānajananaśaktiḥ, guṇadoṣābhāvayor anyatarasya ca prāmānya-jananaśaktir iti śaktyādhikyam bhaved ity arthaḥ /

そして、簡潔であることから〔真性は生起に関して自律的である〕。認識の原因に認識を生じさせる能力が想定されるべきときに〔その能力が〕真なる認識にふさわしいものとして想定されるならば、能力対象が付加的なものになり、能力は付加的なものにならない。したがって、〔真性の自律性の想定は〕簡潔である。しかし、真性が優良性と劣悪性の非存在のうちどちらか一方に依存している場合、認識の原因には認識を生じさせる能力があり、そして優良性と劣悪性の非存在のうちどちらか一方に真性を生じさせる能力がある。したがって、能力が付加的なものになるだろう。以上が〔この箇所〕の意味である。

3.3.2.2.3. 偽性は劣悪性に随伴するから他律的である

aprāmānyam tu na jñānāhetumātrādhīnam, doṣānvayitvāt / kāmīlādaḥ doṣe saty eva hi tad bhavati / na ca guṇānām prāmānyāhetutvād guṇābhāve jñānāhetubhya evāprāmānyam iti vācyam, saty api guṇe jñānotpādānāya jñānāhetūnām avaikalyāt tanmātranibandhanasyāprāmānyasya pramāṇe 'pi prasaṅgāt /

一方、偽性は認識の原因だけに依存していない。なぜなら、〔偽性は認識の原因の〕劣悪性に随伴するからである。周知のように、黄疸などの劣悪性がまさに存在している場合、それ（偽性）は存在する。

【反論】優良性が真性の原因なのだから、劣悪性の非存在がある場合には認識の原因だけをつうじて偽性が生じる。

【回答】そのように言うことはできない。なぜなら、優良性が存在する場合も、認識を生じさせるために認識の原因は不完全ではないのだから、偽性がそれ（認識の原因）だけにもとづくとするならば〔偽性は〕真なる認識にも存在することになってしまうからである。

3.3.2.2.4. 偽性は多様であるから他律的である

vaicitryāc ca / saṃtamase bhūtale saṃyuktāyām ekasyām eva vāridhārāyām sraksarpaya-jjurūpeṇa atathābhūtārthāvadhāratvalakṣaṇasyāprāmānyasya vaicitryāt tatra vicitrā doṣā eva taddhetavaḥ, naikarūpā cakṣurādikā jñānasāmagrī, kāryavaicitryasya kāraṇa-vaicitryam vinānupapatter iti /

そして、〔真性とは違って偽性は〕多様であることから〔偽性は生起に関して自律的ではない〕。真暗闇の中で地面の上で結ばれたまき一本の〔象捕獲用の〕縄に関して、花輪や蛇や紐として非如実である対象を確定することを特徴とする偽性は多様なものだから、それぞれの場合において多様な劣悪性こそがそれ（偽性）の原因である。視覚器官などの認識の原因集合が単一の本質をもっているということはない。なぜなら、結果の多様性は原因の多様性がなければ説明できないからである。

3.3.2.3. 新規情報供与性はこの文脈では問題にされていない

syād etat—yadi jñānāhetumātrādhīnam prāmānyam bhavet, bhavet tarhi smṛter api prāmānyam / tan na, prāmānyaśabdenātra prāmānyāvayavabhūtasya tathābhūtārthāvadhāratvaśaktimātrasyaivopādānāt, tasyaiva ca jñānāhetumātrādhīnatvasamarthanāt, anyathā naiyāyikamate 'py aprāmānyasya doṣāhetutvāt tadabhāve smṛtāv aprāmānyāsambhavaprasaṅgāt /

つぎのような反論が起こるかもしれない。

【反論】もしも真性が認識の原因だけに依存しているとするならば、想起も真であることになるだろう。

【回答】それはありえない。ここでは、「真性」という言葉で真性の部分であるまさに「如実である対象を確定するものであること」という能力だけが述べられているのであり、またまさにそれ（如実である対象を確定する能力）が認識の原因だけに依存していることが論証されているからである。もしもそうでなければ、ニヤー

ヤ学派の理論でも偽性は劣悪性を原因としているのだから、それ(劣悪性)が存在しない場合、想起は偽ではありえないことになってしまうからである。

3.3.2.4. 真なる認識は特殊な認識であるという理由で真性が他律的になることはない

yat punaḥ pramā jñānahetvatiriktahetvadhīnā, kāryatve sati tadviśeṣatvāt, apramāvat, ity anumānam, tat pramā guṇadoṣābhāvayor anyatarādhīnā na bhavati, jñānatvāt, apramāvat, ity anena nirviśeṣaṇahetujatvena viśeṣaviśayatvena ca śīghrapravṛttena bādhitaviśayaṃ karaṇīyam /

【反論】しかしながら、

【提唱】真なる認識は認識の原因以外の原因に依存している。

【根拠】〔真なる認識は〕結果であり、特殊なそれ(認識)であるから。

【実例】偽なる認識と同じように。

以上のように推理される。

【回答】その〔推理〕は、

【提唱】真なる認識は優良性と劣悪性の非存在のうちどちらにも依存していない。

【根拠】〔真なる認識は〕認識であるから。

【実例】偽なる認識と同じように。

というこの限定要素をもたない根拠によって生じたものとして、そして特殊を対象にするものとして、即座に作用した〔推理〕によってその対象を否定されることになるだろう。

3.3.2.5. 真性の生起に関する自律性の証明終了

ata utpattāv api jñānahetumātrādhīnatvāt svata eva prāmāṇyam, aprāmāṇyaṃ tu doṣādhīnatvāt parata iti siddham / siddham ca vedānām apauruṣeyatvena guṇābhāve 'pi doṣābhāvamātrāt prāmāṇyam iti sarvam anavadyam /

以上のことから、生起に関しても真性は認識の原因だけに依存するのだからまさに自律的であり、一方、偽性は〔認識の原因の〕劣悪性に依存しているのだから他律的であるということが確立される。そして、ヴェーダ聖典は非人為

的なものなのだから優良性が存在しないとしても、劣悪性の非存在だけをつうじて真になることが成立する。以上のようなすべてのことに異論の余地はない。

3.4. 自律的真性論の説明終了

iti svataḥprāmāṇyavādo nāma tṛtīyavādaḥ samāptaḥ /

以上で「自律的真性論」という名前の第三の理論は〔説明し〕終わった。

テキストと参考文献

KT: *Kāśikā* of Sucariamiśra. Edited by S. Sāmbaśiva Śāstrī. Reprint: Trivandrum Sanskrit Series, nos. 23, 29 and 31. Madras: CBH Publications, 1990.

TT: *Tātparyāṭikā* of Uṃvekabhāṭṭa. Edited by S. K. Rāmanātha Śāstrī. Madras University Sanskrit Series, no.13. Madras: University of Madras, 1971.

TS: *Tattvasaṃgraha* of Śāntaraksita. Edited by E. Krishnamacharya. Gaekwad's Oriental Series 30. 1926. Reprint: Baroda Oriental Institute, 1984–88.

NTĀ: *Nītitattvāvirbhāva* of Cidānanda. Edited by Nārāyaṇapilla, Anantaśayanasaṃskṛtagranthāvali No. 168, Anantaśayanaviśvavidyālaya, 1953.

NR: *Nyāyaratnākara* of Pārthasārathimiśra. Edited by Svāmī Dvārikādāsa Śāstrī. Prācyabhārati Series, no.10. Benares: Tara Publication, 1978.

YD: *Yuktiḍīpikā*. Edited by A. Wezler and Sh. Motegi. Alt- und Neu-Indische Studien, 44. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998.

ŚV: *Ślokaṅkārttika* of Kumārila Bhaṭṭa.

SK: *Sāṃkhyakārikā*. See STK.

STK: *Sāṃkhyatattvakaumudī* of Vācaspatimiśra. Edited by G. Ś. Musalagaonkar. The Kashi Sanskrit Series 208. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1971.

Arnold, Dan

2001 “Intrinsic Validity Reconsidered: A Sympathetic Study of the Mīmāṃsaka Inversion of Buddhist Epistemology,” *Journal of Indian Philosophy* 29 : 589–675.

Taber, John

1992 “What Did Kumārila Bhaṭṭa Mean by Svataḥ Prāmāṇya,” *Journal of the American Academy of Religion* 112-2 : 204–221.

片岡 啓

2002 “Validity of Cognition and Authority of Scripture,” 『印度学佛教学研究』50-2 : (11)–(15).

2003 “The Mīmāṃsā Definition of Pramāṇa as a Source of New Information,” *Journal of Indian Philosophy* 31 : 89–103.

志田泰盛

2004 「認識の確度と行為発動条件 —インド古典論理学派各論師の真知論の特徴—」『仏教文化研究論集』8: 3-26.

若原雄昭

1993 「インド哲学に於ける真理論の一資料—*Nyāyaratnamālā* 研究—」, 『龍谷大学論集』443: 88-108.

(いしむら すぐる, 広島大学大学院
文学研究科博士課程後期 [インド哲学])